

令和3年度第1回大阪府総合教育会議

議事録

日 時 令和4年1月24日（月）午前11時10分から午後1時00分まで

場 所 第一委員会室

出席者 知事 吉村 洋文
教育長 橋本 正司
教育委員 竹若 洋三
教育委員 井上 貴弘
教育委員 岡部 美香
教育委員 中井 孝典
教育委員 森口 久子

<近畿大学附属高等学校>

校長 中川 京一

<興國高等学校>

校長 草島 葉子

<大阪府立夕陽丘高等学校>

校長 網代 典子

1. 開会

(川端企画室長)

- ・ただいまから、令和3年度第1回大阪府総合教育会議を開催いたします。
- ・皆様におかれましては、お忙しい中ご出席を賜り、誠にありがとうございます。
- ・私は本日の進行を務めます、大阪府政策企画部企画室室長の川端でございます。どうぞよろしくお願いいたします。
- ・本会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の4の規定に基づき設置しているものでございます。
- ・それでは早速、本日ご出席の皆様方をご紹介します。吉村大阪府知事でございます。橋本教育長でございます。竹若委員でございます。井上委員でございます。岡部委員でございます。森口委員でございます。中井委員でございます。
- ・今日はこの他、近畿大学附属高等学校の中川校長先生、興國高等学校の草島校長先生、府立夕陽丘高等学校の網代校長先生にもご出席いただいております。

2. 議事 コロナ禍における特色ある教育

(川端企画室長)

- ・それでは早速議事に入りたいと思います。
- ・本日は「コロナ禍における特色ある教育」および「府立高校におけるヤングケアラーの支援について」の2点について議論を予定しております。
- ・まず「コロナ禍における特色ある教育」についてです。
- ・長期化するコロナ禍における学習機会の保障などの取組みについて総括させていただくため、本日は、近畿大学附属高等学校、興國高等学校、府立夕陽丘高等学校より、それぞれ特色ある取組みを10分程度ずつで発表いただきたいと思います。

それぞれの学校の取組みについて説明。

- ・近畿大学附属高等学校（資料3）
- ・興國高等学校（資料4）
- ・府立夕陽丘高等学校（資料5）

(川端企画室長)

- ・それではここから意見交換に入らせていただきたいと思います。
- ・教育委員の先生方でどなたかご意見、ご質問等ございましたら。

(森口委員)

- ・教育委員として、府内の学校教育におけるICT教育については、進めていくべきと考えています。
- ・最初に発表いただいた近畿大学附属高校では、コロナ禍の2年の間に、ICT教育が進んだとのこと。
- ・ただ、教育現場には、自分たちでできるという子ども、みんなと一緒に学びたいという子ども、それから社会へ巣立つために心と体の準備をしなければならない子どもなど、様々な子どもたちに対して、様々な学びを私たちは守る必要があります。

- ・その中で、高校の先を見据えた学校のあり方について、どのように模索しているのか教えていただきたいと思います。
- ・また、非常にバラエティーに富んだ教育をされているのが興國高校だと思います。
- ・不登校の子どもたちも、発達障がいのある子どもたちも見られているということで、いま、求められている教育の現場を示していただきました。
- ・スクールコンシェルジュについてもお話がありましたが、それは教職員のマンパワーで可能なのか、それとも一人一人の教職員の専門性を非常に重要視しているのでしょうか。また、発表にありましたように、校長のガバナンスの変容で、他の学校でも十分コントロール可能なことなのか、教えていただきたいと思います。
- ・夕陽丘高校は、やはり府立高校の様子がここに現れていると思います。
- ・幼・小・中の子どもたちに、本当に ICT が浸透することが望ましいのか、望ましいとしても、どういった取り組みをしていくのかについては、我々も医学的に取り組んでいるところです。
- ・視力の問題や、対面や触れ合いの中で経験値を増やしていく成長段階の子どもたちに、ICT がどこまで有用なのかという課題があります。夕陽丘高校の生徒 ICT 委員会は、生徒自らが前を向いて取り組んでいるということですが、中学生には高校の授業のような使い方はできない。その中で、高校生が、自分たちが誰かに教える、また自分たちが作ったプログラムなどを利用してもらうという機会があれば、大きく飛躍できる学びになってくると思う。そういったことも、これから ICT を進めていかなければならない学校のために、ぜひとも公立の学校としての役割として担っていただけたらと思います。

(近畿大学附属高等学校・中川校長)

- ・オンラインが、実際の対面授業を全く代行するということは不可能なことだと思っています。
- ・例えば、調べたり、知識を入れることなど、ICT の活用がより優位なこともあります。
- ・ただ、調べてわかることは調べるが、それは経過であって、求めていることではない。「アンゲラブル」という言葉があるのですが、調べても出てこない、調べたことをもとに自分たちでその課題に答えを出していかなければならないことを意味しますが、やはり、チームや皆と一緒にやっていかなければいけないこともあります。調べたことを使ってどうするのかということを、情報を手に入れて自分が考察していく、自分たちでいろいろ意見交換しながらやっていく。そういった学びが結局その先にある。
- ・本校では、Apple と提携をしております、2014 年から ADS (Apple Distinguished School) という認定を受け、また、90% ぐらいが Apple Teacher の資格を取っています。
- ・その中で、Apple の研修会に出席すると実感するのは、アジアという単位で考えても日本が一番遅れているということです。
- ・シンガポールは最高水準で進んでいますが、いろいろな話を聞いていると、やはり今求めている学びとは一体何かというのが一番問題になります。
- ・あるいは、よく言われるのは、高校では当然のことに、理系文系を分けて学習しますが、日本の他にそんな国はありません。他の国では、全ての教科を高校で学ばなければいけません。
- ・日本の教育は受験型になっていますが、一方、他の国では全てを学ぶことが絶対必要だというところに大きな違いがある。

- ・グローバルな人材の育成をめざすならば、そういった状況を掴んで、一足飛びには難しいかもしれませんが、何とかそれに繋げるようなやり方が必要だと感じています。
- ・本校では、あくまでも ICT はツールであって、生徒たちは学校へ来てみんなで学ぶから、対面であるからこそ価値があるんだということを、本当に意識づけるということが一番大切だというふうに取り組んでおります。以上です。

(興國高等学校・草島校長)

- ・私は実は校長もやっておりますけども理事長もやっております、学校作りということが、私の頭の中では毎日動いています。
- ・この短期間に大きく動いたことは、それは、中川先生がおっしゃったように、教員の採用、あるいは組織をどう作るかというところ、また、その専門性です。
- ・ICT が中心になってきますと、近畿大学附属高校さんのような大きな組織ですとうまくいくこと、例えば情報共有、教授の先生や Apple と組むということが出来るんですが、私たちの学校では、NEC の社員さんに学校へ入ってきていただく。あるいは元 IT 企業にいた先生に、教師として入ってきていただく。そのように陣立てをまず変えました。
- ・スクールコンシェルジュの件ですが、いろんな役割の先生もいます。
- ・心理学を勉強した方もいらっしゃれば、長年、中学校で校長先生をやられた方、それから不登校生徒の扱いに慣れた方など、いろんな方に入ってきていただいて、第一次対応をしていただく。
- ・そして先ほど申し上げたドクターなどの医療・福祉などのスタッフにはお金がかかるのですが、かけた分だけ生徒に還元されています。
- ・教師だけではなく、様々なパーソナリティが集まって、それが見事なハーモニーとなると良い学校ができる。そのコンダクターが私だと僭越ながら思っています。
- ・例えばグローバルというテーマでも、コロナ禍で留学に行けないという課題がありますが、本校ではオンライン留学や、あるいは教員の中にネイティブの教員を多く採用して、生徒が英語を喋る場面をたくさん作ったり、英語のオンライン学習については、旅行社と組んで、教室がそのまま海外の教室になるといったことにもチャレンジしていこうと思っています。
- ・それには、海外留学を経験した教師を一定数確保したりするほか、不況で、非常に生活がみんな苦しくなっているので、学校に予備校的な機能も兼ね備えて、お金を取らないということもやらせていただいています。
- ・スクールコンシェルジュの中で一番大切なのは、親の相談に乗ることです。
- ・実は、高校では、生徒だけが悩んでいるのではなくて、家庭が悩んでいることが大半で、後ほどのヤングケアラーの話もありますが、その背景、夫婦関係などを分からないといけませんが、若い先生だけではそれを聞き出せないのも、ベテランの先生にも入ってきていただいて、大きく包容力のある相談相手になることが、肝になっているところです。

(府立夕陽丘高等学校・網代校長)

- ・本校は、自主自律をモットーにしており、生徒たちが様々なことをよく考えます。
- ・コロナ禍においても、社会の一員である自分たちがどのように行動しなければいけないのかということなどを常に考えています。

- ・コロナ禍で、どう活動していけば、自分たちの学校生活を少しでも充実したものにできるのかということを考えて、学校行事についても、生徒たち自らが作り上げ、感染対策を確実にした上で実施させていただきました。
- ・自分たちの行事をなくさないんだ、学校の中から濃厚接触者を出さないんだという自分たちの取組みを大事にしています。
- ・そういった取組みの一つとして、生徒の ICT 委員会というものも立ち上がったわけですが、すべてのことに ICT を使うのがよいとは彼らも思っていません。
- ・効果的な活用場面はどのようなところなのか、対面でできないところをどういうふうに工夫すればよいのか、そういったことを生徒と一緒に研究していますので、何らかの形で発信していけたらと思っています。
- ・本校では、昨年 11 月に全日本教育工学研究協議会で、ご覧いただいた音楽の授業なども発信させていただきました。このように、今後も発信していけたらと思っています。

(川端企画室長)

- ・岡部委員からお願いします。

(岡部委員)

- ・先生方がこの 2 年努力されてきたことが、良い形で実りつつあるというのがわかって、まだまだ日本は元気になれるんだということを教えていただいたように思っております。
- ・先生方へ質問させていただく前に、知事に申し上げます。
- ・3校の取組みはとても素晴らしいことで、このような形で進めていける高校ももちろんあると思いますので、3校をモデルにして ICT 化を進めていただきたい部分もありますが、同じようにできない学校というのが半分ぐらいあります。
- ・近畿大学附属高校もおっしゃっていましたし、興国高校もおっしゃっていましたけれども、生活習慣というのが本当に大事で、その生活習慣が一定できているこれらの学校でも、コロナ禍に際して、これだけ力を入れないと、普通のカリキュラムがこなせなかった。
- ・生徒さんたちの生活習慣というところが、コロナ前から大変だった学校はたくさんあります。学習習慣ができていないところもありますので、そういった高校に同じような取組みをしてしまうと、それはそれで大変なことになります。
- ・ヤングケアラーのところで、また改めて申し上げようと思いますが、全ての学校で、同じように ICT 化ができるわけではないということは、ご存知でいらっしゃると思いますが、改めて確認させていただきたいと思います。
- ・それでは、先生方にお伺いしますが、先生方にも得意・不得意がありますし、また、家庭も、生徒自身も ICT への対応は難しいという場合もあります。先生方へのチアアップや研修を具体的にどうされたのか、また、保護者、家庭への支援をどうされたのか、同じように ICT 化していきたいという学校は特に聞きたいところだと思いますので、お伺いしたい。
- ・また、その際に、先ほど企業の方と連携したと伺いましたが、特に興国高校は心を支えるとおっしゃっていました。夕陽丘もそうおっしゃっていましたが、心を支える側の先生方もいっぱいいっぱいだったと思います。そのようなときに、どのような外部人材と連携したのか教えていただければ

と思います。

(興國高等学校・草島校長)

- ・本校の場合は、商業学校からスタートし、沖縄サミットがあったところに、商業課程を改称し、IT ビジネス科を立ち上げました。
- ・IT ビジネス科という名前に変えることによって、自分たちが IT を教えないといけないという意識改革に繋がり、そこから先生たちの勉強が始まっています。
- ・その先生たちが中心となって、リーダー役をやってくれました。
- ・そして、IT スキルの高い方を採用し、コアの集団を作り、そのコア集団とあわせて外部講師による勉強会を開催し、また、企業からも IT スキルの高い方に来ていただいています。
- ・NEC から来ていただいた先生には、学校の IT の状況について、思っていたより進んでいますねと言っていたいただきました。
- ・また、先生方のモチベーションをアップする方法については、先生によって得意、不得意はもちろんありますので、学年団、あるいは教科のグループを作りながら、みんなが前進できるようにチームワークを重要視して、グループワークをしながら前へ進んでおります。
- ・どうしてもできなかつたら、ギブアップ宣言をして手伝ってもらおうということがあるのですが、公立の校長先生をされていた一番高齢の 80 歳近い先生が、ぜひやらせてくれということで、ご自分の部屋のリビングをスタジオにして動画を作り上げていただきました。
- ・それを披露していただき、本気の教師魂を見せていただき、「こんなときに頑張らなければ、誰が頑張るねん」と叱咤激励をしていただきましたので、我々もやる気になったというところです。
- ・教師も 1 人にしないということで、Zoom ミーティングをたくさんいたしました。笑顔のあるミーティングをしようということで、和気あいあいとやるということだけは忘れておりません。
- ・また、教師には色々な評価がつくので、頑張ろうという意識を、全員に個別面談をする中でも全員にさせていただくよう話をしますし、他にも生徒からサンキューレターとリクエストレターをもらう取組みもあります。
- ・サンキューレターというのは、「先生ありがとう」というポイントです。
- ・リクエストレターというのは、クレームレターはちょっと受け取りにくいですから、先生このところをこうやってしてほしいというようなリクエストです。
- ・そういう生徒からの意見が返ってくるので、やる気を高めることができるという流れでございます。

(岡部委員)

- ・素晴らしい取組みなので大学でも取り入れたいと思いました、ありがとうございます。

(川端企画室長)

- ・中井委員お願いします。

(中井委員)

- ・近畿大学附属高校の中川先生がおっしゃられましたが、グローバルな教育について、日本は遅れて

いるということですが、私も十数年前にシンガポールに行きまして、小中高の授業を見させていただきまして、ものすごく進んでいるなと思いました。

- ・その頃からどんどん ICT 化をしていかないと、日本は遅れる、世界に埋没するんじゃないかとずっと危機感を持っていた。
- ・ところが、なかなか財政難ということもあって、ICT 化は進みませんでした、ピンチはチャンスということで、コロナで一気に進みました。これは本当にうれしいことだと思っています。
- ・ただ、先ほど岡部先生もおっしゃられましたように、学校によっていろいろ課題もありますし、それから生活環境も全然違いますので、全部同じというわけにいかないと思うのです。
- ・ただ、どんな学校であっても、グローバルな人材を育てないといけないというのは共通だと思いますし、これからの学びというのはそれぞれの授業を通して知識を蓄えるといいますか、増やしていくことも大事です。
- ・例えば数学では、答えは間違えても、途中の考え方が合っていればいいという感覚を僕は持っているのです。考え方というのは、これからどんどん大事になってくると思います。
- ・特に近畿大学附属高校さんは特に進んでおられると思いますし、興國高校さんも素晴らしい取組みをされているので本当に羨ましい。
- ・公立高校は、なかなかそうはいきませんので、夕陽丘高校さんも公立の資源の中で素晴らしい生徒の人材活用をして、目一杯のことをやられていることも感動しました。
- ・それぞれの学校で、あるいは自分の学校でもいいのですが、これからは日本の教育を、ICT を通じて、どんなふうにしていくべきかビジョンがありましたら、簡単に教えていただけたらと思います。

(近畿大学附属高等学校・中川校長)

- ・本校では、今 ICT でいろんなことをやっているのですが、その中でめざすところをもっとクリアにするため、今、取り組んでおります。
- ・実は IB、国際バカロレアの候補校に手を挙げまして、早ければ今年度何とか認められるかなというところですよ。
- ・わずか 15 名ぐらいのコースになりますが、その IB の学びの目的や取組みというのは、全てのコースに当てはめられることですので、そういった教育観をまず変える。生徒たちにどんな力をつけさせようか、その力をどう活かしていくのかということをしつかりと踏まえた上で、それを全てのベースにしていかなければ、他の国の人材と競合していくなかで、自分たちの力で生きていくことができないと考えています。
- ・そのために、学び方を習得し、自分で学びを進めていくといったことのトレーニングを学校の中ではすべきであって、その意識をまず教員がしっかりと持つということ。
- ・特に本校の背景としましては、近畿大学への進路保障ができる場所があり、法人もめざしているところですけども、やはり明確な指導観というものをしっかりと共有していかなければ実現しないと思っています。
- ・その一つの形として、IB の導入に踏み切り、それを今は教員の方が、その妥当性、必要性を感じそれを教育観として落とし込んで取り組むという流れで進めようとしております。

(興國高等学校・草島校長)

- ・今の子どもたちは、赤ちゃんの時からママの顔を見ていなくて、タブレットを見ているという子どもたくさんいるわけです。
- ・育ってくる過程の中で、彼らがどういうふうに ICT と付き合ってきているかということを分析して、その中で高校課程では何を足したら良くて、その先にはどうしたらいいか。
- ・情報過多の中で大きくなっているのに、いらぬものを削いでやるということが教育する方法のなかで必要ではないか。
- ・では、いらぬものを削ぐときには何が必要かということ、教職員の中にしっかりした柱がなければならぬので、それを我々は作り上げていっています。学園では、例えばこの時間帯は携帯を触るなどか、タブレットを触るなどかということを今まで行ってきましたけれども、果たしてそれが正しいのかも含めて、子どもたちと共有していかなければならないと思っています。子どもたちはもう 24 時間携帯やタブレットを触っているのが当たり前なので、これから夢を描いていくことができる教育をするためには、志を描いて、そして納税者になる教育をするために我々は何をしなければいけないか。
- ・グローバル化というのはまた別のところにあるかと思うのですが、グローバルというのももちろん大切ですけれども、学校の中がまずグローバルになるという状況を作って、貧しくても貧しくなくともグローバル化にしていけるような教育をしたいと思っています。

(府立夕陽丘高等学校・網代校長)

- ・公立高校の代表としてお話するのは非常に難しいです。先生方がおっしゃいますように、それぞれの学校で、抱えている課題は異なるため、それぞれの学校でめざすべき教育というのがあると思います。
- ・ただ、本校がこのようにスムーズに進んだのは、もちろんご家庭の理解をいただけるような状況であったこと、それから、教育庁の支援をいただきながら、教員研修を行い、それを学校の中で先生方がどういうふうに活かしていくのかといったことなどを通じて、生徒たちをどうにかしたい、学校をよい方向に持っていきたい、そういう先生方の思いがあったからだと、非常に強く感じました。
- ・そこで、校長としては、先生方の思いを一つにして、同じ方向に持っていくことで、学校として最高のパフォーマンスとなるように行動していく必要があると思いました。
- ・今回このような場で発表する機会をいただけたのは、この 2 年間、本校では何が必要なのか、予算をどのように活用するのか、そういったことを常に考えてきたからかと思っています。
- ・グローバル化に関しては、本校でも留学生を多く受け入れておりますが、英語が喋れるようになるということではなくて、それぞれ生活を共にする中で、文化を知ることによって、自分の世界観を広げていくんだというような教育に繋げていっています。
- ・これからもその方向で取り組んでいきたいと思っています。接することができなければ、その機会を作るという形を想像しながら頑張っていきたいと思っています。

(川端企画室長)

- ・ありがとうございました。

- ・井上委員お願いします。

(井上委員)

- ・発表ありがとうございました。
- ・僕は質問というよりお話を伺った感想なのですが、中川先生の資料の最後のページに、学校に行かせる日はいつまで続くものなのか、と非常に重い言葉だなと思っています。
- ・一つ考えさせられたことは、今の学校は基本的に小学校、中学校、高校とも、同じ授業を一斉にやって、基準を超えてくださいねということがある意味基準になっているかなと思うのですが、これを少しずつでも変えていくチャンスなのかなと思いました。
- ・やはり対面でしかできないことというのはあると思うのですが、オンラインという新しい技術を活用して、やれることというのが出てくるのかなと思っています。その中でできることというのは、個性を活かしていくといいますか、得意なことをぐっと伸ばしていくということが、オンラインを活用してやっていけることだと思いました。この辺をどうやってミックスしていくかというのを我々は考えていかないといけないと思います。
- ・一つは多様な人材を育てていくということが大事かなと思っています、この前も日本ベンチャーキャピタル協会の会長をやっている方と話してまして、数十年前だと世界の時価総額のランキングというのは、日本の企業が何十社と入っていたのですが、今だと一社しか入っていません。
- ・経済の状況がいろいろあるのですが、やはり人材については、そこは特にアメリカというのは、新しい産業を興そうというようなことに、個性の持った人材がどんどん出てきている。
- ・そういった点は、我々がこれから皆さんと一緒に作っていかないといけないことかなと聞いて思っていました。
- ・今、校長先生がトライしている対面とオンライン、これをどう組み合わせながら、また対面の授業の中でも、裏側でテクノロジー技術を使いながら、どうやって生徒の個性を引き出していくような教育ができるかということは、非常に大事かなと思いましたので、一緒に研究をして勉強していきたいなと思います。
- ・今日はありがとうございました。

(川端企画室長)

- ・竹若委員お願いします。

(竹若委員)

- ・ICTがスタートして、我々は不安ばかりを感じながら、現場はどうなのかなということを考えていたのですが、ご苦労いただいて進めていただいているなということを率直に感じました。
- ・特に、草島校長先生のお金かかるんだ、だけど、投資なんだと、全くその意見に私は同感でありまして、配当のない投資かもわかりませんが、学校の体制を今、ウイズコロナ、ポストコロナの状況の中で、何を求めていくのかという基本的な体制を、教職員をはじめ、保護者にも求め続けていくと受け取りました。
- ・特に近畿大学附属高等学校さんの心の繋がりをということに感銘を受けました。
- ・学校に行かなかったら心の繋がりがどうなるのかということも不安材料の一つであります。

- ・しかし、今日の話聞かせていただいて安心もしましたがオンライン授業と対面授業の違いをどう克服して、生徒たちに、より効果の高いものは何なのかなということを求め続けていただければなと思っています。今日はどうもありがとうございました。

(川端企画室長)

- ・ありがとうございました。
- ・そうしましたら、教育長、続いて知事からコメントをいただいて、この議論を終わらせたいと思います。よろしくお願いします。

(橋本教育長)

- ・3人の校長先生方、ご発表ありがとうございました。
- ・発表を聞かせていただいて、コロナ禍の学びの保障において、オンラインで学習を保障するということに加えて、子どもたちの生活リズムを保つために、朝はオンラインでホームルームを実施するなどとお話聞かせていただきました。
- ・府立高校でも大部分の高校は、オンラインを使って、朝、ホームルームを行っているとは思いますが、これまではオンラインで授業をするようにと強調していましたので、本日のお話を伺い、ホームルームや一日の最後にオンラインで繋がる機会を設けるように改めて周知していきたいと思いました。
- ・それから、ICTを活用したオンライン授業については、近畿大学附属高等学校では、iPadを2015年から導入されたということで、かなり先行しておられるなと感じました。
- ・府立高校でも休校の際にオンライン授業をする際は、時間割や、こういった形でオンライン授業を実施するのかを生徒に事前に示すように指示していますが、近畿大学附属高校の発表にあったスプレッドシートを参考にさせていただき、子どもたちに不安なくオンラインで授業を受けてもらえるように進めていきたいと思います。
- ・今回、コロナ禍で一気にICT化が進みましたが、元々の目的として、オンライン授業のためにICTを導入したのではないと思っています。国では個別最適な学び、協働的な学びと言われておりますが、いずれの面でも、ICTを活用すれば、学びが一層豊かになっていくと思っています。
- ・そのためにも、やはり、できる限り、オンライン授業にトライをして、ICT活用のメリット、それから限界、そういったものを各学校現場でよく分析し、今後の授業に活かしていってほしい。
- ・そういったことを教育庁としても、各現場の声を聞きながら一緒に考え、より子どもたちの学びが充実するように、ICTの活用方策の具体化にさらに努めていきたいと感じました。
- ・今日は本当にありがとうございました。

(川端企画室長)

- ・知事、お願いします。

(知事)

- ・本日は、近畿大学附属高校さん、興国高校さん、そして公立から夕陽丘高校さんの3人の方々、お忙しい中ありがとうございました。非常に参考になりました。

- ・今日は先進的な取組みをされている3校の方がいらっしゃっており、その学校に通っている子どもたちは、校長先生のもとでICT教育のメリットを享受していますが、どうしたら1人でも多くの府立高校生がICT教育のメリット受けられるのかという目線でお話を聞かせてもらっていました。
- ・3校とも、様々に取組みは違いますが、共通しているのは、コロナ禍において後ろ向きではないということです。
- ・コロナ禍の中で、とりあえず休校して、早く過ぎるのを待って、殻に閉じこもろうというような後ろ向きの発想ではなく、非常に前向きな機会と捉えて、様々に大きく一歩前進されている。
- ・これは生徒にとって、ものすごくプラスだろうなと思いました。
- ・それはなぜかという、校長先生が学校の方針として、ICTをいかに活用するかという目的や理念を持っている。もちろん得意、不得意の先生はいるにしても、それを先生方、あるいは生徒とも共有して前へ進めていっている。
- ・そこはおそらく3校共通している。僕が見ていた目線でも、もちろん岡部先生がおっしゃったいろんな学校のレベルはあると思うのですが、全く同じことをする必要はないと思うのです。
- ・でも、共通にICTをうまく使って、いわゆるITじゃなくてICTなんだと、Cの部分を強調して、子どもたちの学習機会を増やすんだという共通理念を、全校で共有することが生徒たちにとってものすごくプラスになるだろうなと思いました。
- ・興国高校の校長先生が、私はコンダクターだとおっしゃったのが、すごく印象に残っているのですが、その意識が校長先生にないと、どれだけICTのタブレットを配っても、府は経済的に厳しい子のためにルーターを渡すということを実施していますが、そういった環境を整えても、広がらないと思うのです。
- ・教育庁に今日の会議を受けてやってもらいたいと思うのは、そういった校長先生の意識、ICTは無理に上からやるものではなく、非常に便利なコミュニケーションツールとして、子どもたちの学びをより豊かにしていくのに有利なものなんだという認識をまず持つてもらうことが非常に大切なことだと思います。
- ・近畿大学附属高校の先生もおっしゃっていましたが、これから子どもたちは社会に出て、それこそ激動する社会に対応していく力をつけるときに、教員に全く対応力がなくて、それでどうやって対応力のある子どもを育てるんだというのは、本当におっしゃる通りだと思います。
- ・学力のことだけを言っているのではなくて、学校ごとのいろんなレベルはあると思うのですが、その基本的なスタンスがないと、ICTなんかやらなくてもいい、殻に閉じこもっていたらいい、黒板授業だけでいいんだと、特に公立高校の中では、やらない理由ばかり生じがちだと思っており、僕はそれについてはちょっと疑問を持っています。
- ・今日の様々な先進的な取組みの背景にあるものをもう少し教育庁の中でも噛み砕いて、我々の公立高校も、私学にも共有できるような、特に、方針を決定する校長先生に共有できるようなものについて肉付けを作って、それがあって初めて民間の皆さんとか、NECの話とかAppleの話がありましたけど、民間と事業をどうやって提携するのかとか、技術的な支援の話になってくると思います。
- ・子どもたちにとって、非常にICTはプラスになるツールだというのが重要だと思いますが、そこがまだ根付いてない気がすごくします。
- ・興国高校の先生の話であった、もう一つ強く印象に残っているのが、ICTの教育とハイブリッドにすることによって、不登校の生徒が溶け込んで、また戻ってくるようになった。

- ・ICTを使っていなかったら実現できてなかったことなので、ICTを毛嫌いするのではなくて、ICTはコミュニケーションとして非常に上手く使えば有効なんだという意識を、食わず嫌いじゃなくて知ってもらおうということが僕は非常に重要だと思います。
- ・夕陽丘高校の先生も、限られた資源の中だと思いますけれども、合唱はリスクが高くて、止めろ、止めろと言われていたことを、どうやったらできるのかということで、一人アンサンブルというのをやって組み立てをされた。
- ・ICTは、どうすれば子どもたちの教育にとってプラスになるのかという、あくまでも手段なのです。
- ・今1人1台タブレットも配っているし、環境も一定、公立でも整えるようにしているので、あとは共通の理念、ICTは子どもたちに非常に有利なものなんだということをまず校長先生方に共有していただきたい。
- ・それぞれの学校のレベルに応じて、全く同じ中身をしろと言っているのではないので、理念の共有を今回の会議を通じてやってもらいたいと思います。
- ・民間企業や大学など、外部との技術的な連携が必要であれば、事業としてやっていけばいいと思うので、まず理念の共有をぜひ教育庁にはやってもらいたいと思います。
- ・また、今日聞かせていただいた取組みは非常に素晴らしいと思いますので、全ての学校に共有できるように活用させてもらいたいと思います。
- ・子どもたちが、それぞれのレベルで、それぞれの学校に行って、豊かに小・中・高生活を送れるようにしていきたいと思います。
- ・ICTを使うことによって、それが実現可能だと思います。
- ・今日は3人の校長先生方、本当にありがとうございました。
- ・もう一点、平常時からICTを常に使っているということがものすごく大事だと思いました。やはり有事だけで対応しても難しい。
- ・もちろんICTはプラスになるんだという認識がないと、誰も動かないと思いますから、その認識のもとで、平常時に使い続けることでいざというときに使えるし、そうじゃなかったらいざというとき使えないと思うので、そういったこともぜひ教育庁の中で取り組んでもらいたいと思うのでよろしくをお願いします。

(川端企画室長)

- ・ありがとうございました。
- ・それでは議題1については、ここまでとさせていただきます。

3. 議事 府立高校におけるヤングケアラーの支援

(川端企画室長)

- ・続きまして議題2のヤングケアラーへの支援について、移らせていただきます。
- ・まず、教育庁より資料の説明をお願いいたします。

資料6について説明。

(川端企画室長)

- ・ありがとうございました。
- ・それでは、ご説明のあった内容について意見交換に入らせていただきたいと思います。
- ・岡部委員お願いします。

(岡部委員)

- ・ヤングケアラーに関しては全国的にも取組みが始まっておりまして、大阪はその中でもどちらかというと、以前から取り組んできているところだと思いますが、まだまだ現状に対応しているとは言いがたいと思います。その点で知事に是非お願いしたいことが2点ございますので、ここで申し上げたいと思います。
- ・まず、今回のアンケートでは、回答自体がやはり限られた人数しか出てこないという部分がありました。
- ・8割が無回答という状態になっていること、それから回答した人でも「望むものはない」とか、「特に相談していない」と答えている事に対し、それを問題が無いと捉えるような理解や対応を、行政や学校ではしないようにお願いします。
- ・本来だったら、もっと、子どもたちからお願いしたいことが具体的に出るはずなのに、高校までずっと何らの手立てがなかったことで「もう言ってもしょうがない」という子どもたちの思いが、アンケートの回答が出てきてこないという形になっている可能性が十分に考えられるということに基づいて動いていただきたいと思います。
- ・調べて、回答がなかったから問題ない、というような理解をしてこのヤングケアラーの調査や対応を進めないでいただきたいというのが大前提のお願いです。
- ・子どもたちができるだけ言いやすい環境を整えてもらいたいと思います。具体的には、先ほどももちろん知事がおっしゃったように、ICTを進めていくことによって進む教育領域はありますので、基本的にはそれに対応できるような教員、学校を作っていくことはとても大事だと思いますが、先ほどの報告にもありましたように、教員と面談して初めて言えるようになったとか、その時にも、子どもたちは教員に最初からは言わないけれども、ちょっと言葉に詰まった、顔色がおかしかった、目を伏せたというようなことをきっかけに聞いていったということが多いはずで。
- ・毎日、教員が子どもたちと会うことで、これは森口先生の方が詳しいと思いますけど、何か臭いがするとか、ちょっと服が汚れている、そういうことから気づくことが多い領域なので、ICTでは対応できない部分は本当にたくさんあります。
- ・教育長もおっしゃっておられたように、ICTを進めていく部分と、そうではなくて、ちゃんと教育の基盤を作っていく部分というのを分けた上で、是非、子どもたちが言いやすい環境を整えていただきたい。
- ・そこで知事にお願いしたいのが、民間を学校が活用できるような環境を整えていただきたいことです。
- ・学習支援員やキャリアコーディネーターを雇うことに加えて、NPOなどの民間でなければできないことはたくさんあります。
- ・特に、学校の先生に対しては、「もう来てくれるな」と言われたらそれ以上踏み込めませんが、民間の方だったら、家庭に入り込んでいける。
- ・あるいは、お父さん、お母さんを福祉機関に連れていく際も学校の先生だとできないですが、NPOだ

と福祉と連携することができる。

- ・生活環境が整わないと、子どもたちの学習環境も整わないので、子どもたちを助けることは家族全員を助けることと同義だと考えますと、学校ができないこと、行政ができないことを、NPOの方たちとうまく連携していけるようなシステムを府庁、そして学校が整えられるように行政を動かしていただきたいと思います。
- ・それに付随して、府の教育委員会と福祉部との連携を是非進めていただきたいと思っております。

(川端企画室長)

- ・森口委員お願いします。

(森口委員)

- ・ヤングケアラーという問題を発端に、教育と医療、そして福祉の連携に光が当てられてきているのをとてもありがたく思っています。
- ・岡部委員がおっしゃったように、ヤングケアラーは自分から相談しない。
- ・アンケートの回収率が低いことについては、児童精神科の考え方からすると、「共依存」という形があり、「お母さん、お父さんは、一生懸命するから愛してくれているんだ。お父さん、お母さんから『あなたが頑張ってくれるから助かるわ』という言葉がなかったら、愛してもらえないのだろうか・認めてもらえないのだろうか」と、そういう言葉の中に成り立っている関係があります。
- ・自分から相談しないし、現状を間違いだと思っていない、つまり、間違いと認めたら自分の存在意義がどこにあるのだろうか子どもたちや家庭は追い詰められていると思います。
- ・ただ、高校生まで成長すると話を聞いてくれた・心配してくれた人がいるという本当にわずかなことでも、子どもたちの視点は変わってきて、生きる力に繋がっていくと思うんですね。
- ・知事との意見交換の機会ですので現場の学校の養護教諭の先生のお声を少しでもお届けしたいと思っています。
- ・ヤングケアラーの問題以前にも、このコロナ禍で、子どもたちのメンタルケアはもうズタズタになっています。
- ・対面する機会がないからだけでなく、心と心が繋がっていない、孤立というのがすごく大きい。
- ・その中で、養護教諭はことごとく疲弊していますし、様々なことに取り組んでいかないといけない状況です。
- ・そうした中で、やはり外部人材の必要性は私もすごく感じています。
- ・一言で言うと、担任では子どもとの距離が近すぎたり、学校では対応できないなどの状況もあり、学校の先生方も、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーをととても望んでおられます。
- ・メンタルケアが必要な子どもたちが増えている中で、スクールソーシャルワーカーや支援員などの外部人材が、心配してくれた、こういう方法があるよと言ってくれたという経験が、子どもたちの頑張っていて生き抜いていく力につながると思います。
- ・人材配置には、注力していただきたいと思います。
- ・岡部委員のおっしゃった福祉部と教育庁との連携は、知事のお考えで進めていただきたいのですが、週1回でもスクールカウンセラーが全校回ってくれたり、それが現時点で難しい場合は、状況の厳しい学校については養護教諭の複数配置をするなどそういった対応をお願いしたいと思いま

す。

- ・コロナ禍で、子どもたちのメンタルケアが大変な状況になっていることが、ヤングケアラーの問題と合わせて、顕在化し、国を挙げて対応を進めようとしています。大阪は進んでいるので、引き続きお願いしたいと思います。

(川端企画室長)

- ・ありがとうございました。
- ・もう時間ですので、ここで取りまとめさせていただきたいと思います。
- ・まず教育長からお願いします。

(橋本教育長)

- ・ヤングケアラーのアンケート結果につきましては、12月にその概要を発表させていただき、本日、クロス集計した結果を含めて、改めてご説明させていただきました。やはり世話をしている家族がいる子どもたちの方が、そうでない子どもたちと比べると、学習面でもいろいろと課題が出ていることが、一定明らかになったと受けとめております。
- ・岡部先生と森口先生の方からお話でしたが、「気づく」という面についても、やはり教員だけではなかなか難しいところがありますので、外部の専門家の方の力を借りて、気づく面、繋ぐ面について、学校力、または学校の機能を是非高めていきたいと思っております。
- ・また、支えるという面については、学校の教員が家庭を支えるというのは難しい面もございますので、主として市町村の福祉、それから岡部先生からありましたように、それを繋ぐ民間のNPOなどの団体にも積極的に繋いでいただき、福祉で是非対応していただきたいと思います。
- ・学校では、やはり、学習面の遅れ、それから将来の自分の進路に対する不安といったものが、アンケートで出てきておりますので、それに対応するための体制強化を知事のご理解を得て、進めていきたいと思っております。

(川端企画室長)

- ・最後に知事お願いします。

(吉村知事)

- ・ヤングケアラーについては、その家庭環境によって、本来の学習であったり、学校生活に正面から取り組むことが、なかなかできないという状況ですから、正面からそういった課題を取り除いていくことが非常に重要だと思っています。
- ・子どもたちの未来のことを考えても、ヤングケアラーの問題に正面から取り組んでいきたいと思いません。
- ・森口委員、岡部委員からのご指摘でもありましたけども、教育だけの話ではなくて、やはり福祉の側面が非常に強い。
- ・今まで、役所というのは、どうしても教育と福祉、医療、それぞれ縦割り、部署も縦割りです。やっていることも縦割りで、サービスも縦割りなので、それぞれバラバラの空間。
- ・学校自身の体質としても、他の民間とか外部を学校の中に取り込まないという環境が、いろんな教え

る分野も含めて、やっぱりあったと思うのです。

- ・でもヤングケアラーの問題に正面から取り組もうと思うと、やはり縦割りは排除していかななくてはならない。福祉の部分、教育の部分がしっかり連携してやらなければ、この問題と正面から取り組めないと思っている。
- ・教育庁と福祉部が、ヤングケアラーについては共通して取り組むという視点でお願いしたいと思います。
- ・府の組織としても、子どもの組織を再編いたしまして、子ども家庭局を設置したいと思っています。
- ・これは4月の年度替わりから動き出すという予定にしています。そこでヤングケアラーの問題も取り組んで、そして教育庁がしっかり中に入ってやってもらいたいと思います。
- ・福祉的側面が非常に重要だと思います。
- ・それから、やはりスクールソーシャルワーカーの体制の強化、増員、スクールソーシャルワーカースーパーバイザーの新設を大阪府で進めていきます。
- ・その中で、岡部委員がおっしゃったように、民間のNPOとか、民間の団体とどう連携していけるのか、連携していくべきだと私は思うので、どうやって関係を深めて、学校の中に入ってきてもらうのか、ヤングケアラーの問題に関わってもらうのか、そういったこともこの大阪におけるヤングケアラーの対策の中に組み込んでいきたいと思っています。
- ・スクールソーシャルワーカーの増員にあわせて、どうやって民間のNPOの皆さんと、あるいは民間の団体の皆さんと共同でヤングケアラーの課題に取り組むのかという枠組みの検討をお願いします。
- ・岡部委員が最初におっしゃった通り、アンケート調査の回答があったのは20%ですし、そもそも自分がそういう環境にあることに気づいてないということであれば、回答するきっかけがないわけです。
- ・そういったことも頭に入れながら、この問題が深くあるんだということを大阪府としても認識して、そしてヤングケアラーの状態になっている児童生徒を支える仕組みとして、スクールソーシャルワーカーの増員等に加えて、NPOや民間の皆さんとの協力も含めた体制をする仕組みを作りたいと思いますので、よろしくをお願いします。

(川端企画室長)

- ・どうもありがとうございました。
- ・以上をもちまして、大阪府総合教育会議を閉会いたします。
- ・本日は長時間にわたりありがとうございました。

以上